

なぜ？

何も見えない。

何も聞こえない。

ここは一体どこなのだろうか？

体の中に鉛の塊を詰め込まれた様に、全身が極度に重苦しく、非常にだるい。

ここにいるのは俺一人なのか？

他には誰もいないのか？

一体どうなってしまったんだ、俺は？

いすれにしても、現在の自分が置かれている状態も分からないのだから、どうにも動きようがない。

今はとにかく立ち上がって、ここがどこなのかを確認するべきだろう。

ほんの少しでもヒントになる要素が見つければ、少しは明るい展望も見えてくるかもしれない。

自分でも強く意識して体を起こそうとしたが、まるで体と意識の連結が途切れてしまったかの様に、横たわったままの体は一向に動こうとしない。

何者かに拘束されているのか？

いや、拘束されているのであれば、手足や胴に何らかの圧迫感がある筈だ。

俺の四肢はただ無性に重苦しいが、紐の様な物で縛られているといった圧迫感はない。

と言う事は、何かに拘束されている訳ではないのだ。

だとしたら、今の俺には一体何が起きているのだろうか。

どうやら、全身の筋肉が極限にまで緩んでしまった為に、起き上がる所か指先を僅かに動かす事も叶わないらしい。

金縛りか？

いや、違う。

金縛りの様に全身が硬直しているのではなく、むしろその対極にあるとあってよい。

そういえば……。

ふと、自分が瞼を閉じている事に気付いた。

瞼を閉じているならば、当然ながら何も見える訳がない。

幾ら全身の力が入らないといっても、瞼を開けるくらいは出来るのではないか？

普段は意識せずとも瞼の開閉など難なく行なえるのだが、今は瞼の縁が糸で縫いつけられてしまったのではないかと思うくらいに、微塵も動く気配がない。

たかが瞼を開ける事さえ出来ないのか。

一体、俺の体はどうなってしまったのだろうか？

これまでも、他人に丈夫と胸を張って言える程ではなかったが、生まれてこの方大した病気にも罹らず、まさに医者とは無縁の人生を送ってきたこの俺にも、とうとう生命の危機に関わる疫病の魔の手が伸びたのだろうか。

それとも、何らかの精神的な作用によって、自分の意志が脳から体へと適切に伝わらない為だろうか。

医学に関する専門的な知識のない俺には、幾ら時間をかけて考えても納得のいく回答を見出す事は出来ないだろう。

俺はこのまま一切の拳動を奪われて、貝の様に口を硬く閉ざしたまま、永劫の時間が淡々と流れてゆく様を、ただ指を咥えて見ていなくてはならないのだろうか。

このまま何年も、何十年も、微かな明かりさえ届かない、地下の牢獄に繋がれた哀れな虜囚の状態に置かれなければならないのだろうか？

俺と言う独立した一つの意識が確かにここに存在し、今すぐにもこの得体の知れぬ闇の牢獄から開放される事を待ち望んでいるというのに、誰にも気付かれず、最早生きているのか死んでいるのかも判然としない朦朧とした状態のまま、終わりの見えぬ無明の闇に放置され続けなければならないのだろうか？

その様な地獄の責め苦に、俺は一瞬たりとも耐えられまい。

俺は生身の人間だ。

これまでの人生で人並みの生活を送り、多少の不満は残りつつも概ね満足した日々を過ごしてきた、どこにでもいるありきたりの人間に過ぎない。

確かに多少は罪を犯したのかもしれないが、果ての見えぬ地獄の責め苦に痛めつけられる程の大罪を犯したとは思えない。

そんな不条理な現実があって良いものか。

もちろん、俺がこの様な場所で、現状に対する不満と嘆きと憤りに満ちた悪態を垂れ流しても、現在の苦境を脱する役に立たない事だけは明白である。

むしろ、知の盲目なる愚者であるが故の、無謀なまでの大胆さを前面にひけらかしつつ、自ら進んでアリ地獄の巣穴に飛び込んでゆく様な、我ながら愚かな悪足掻きという気も一方ではしなくもない。

ただ、『何をしたって無駄だ』とどこかで感じてはいても、何もせずにはいられないのだ。

俺は人生の敗北者ではない。

俺の未来は、明日への夢と希望に満ち溢れて、ダイヤモンドを散りばめた様にキラキラと輝いていた筈だ。

だからこそ、幾ら先の見込みの望めぬ状況に置かれていても、この様な場所で朽ち果てるのをただ待っている訳にはいかないのだ。

とにかく、今は何か別の事を考えて、少しでも沈み込んでしまった気分を紛らわそう。

そう、俺がなぜここにいるのか、今までにどういう経緯を辿ってこの様な状況に陥ったのか、それを考えよう。

自分の過去の記憶を辿れば、あるいは、現在の苦境を脱出する為の何らかのヒントが手に入るかも知れない。

俺は、自分の意志とは関わりなく、未来永劫この闇の牢獄に繋がれるという悪しき妄想

を強引にねじ伏せ、今まで俺は何をしていたのか、昨日は何をしていたのか、自らが経験した筈の記憶の痕跡を辿った。

そうだ。

俺は、昨日、久々に職場の同僚と酒を飲んで、不覚にもしたたか酔ってしまったのだ。

その日はちょうど、俺が中心となって取り組んできた新規プロジェクトに関するプレゼンがあった。

会社のお偉方の面々を前に、俺は新規プロジェクトの詳細について、それが会社に与えるメリットについて、出来る限り噛み砕いて丁寧に説明した。

それなりの規模の企業のお偉方ともなると、自分の会社の一部所の細かな業務にまで目が行き届かないからだ。

俺にとっては、自分が主導した初めてのプロジェクトだったし、ここまでの形にする為の時間と手間も相当かけていた。

だから、是非とも会社の許可を得て、このプロジェクトを正式に事業化したかった。

この仕事に賭けていたのだ。

しかし、結果はNоだった。

今までの自分を支えてきた何かが急に取り払われた様に、全てに対してのやる気を失ってしまった。

そんな俺の落ち込み様に共感を示してくれた同僚が、久々に俺を酒の席に誘ったのだ。

そこでどの様なやり取りがあったのかは、全く思い出せない。

ただ、ひたすら酔っていた事だけは、俺の記憶に残されている。

そうだ。

同僚と飲んで、普段の自分から見れば飲み過ぎだろうと言うくらい、それこそ浴びる程飲んで、かなり酔いが回って、それからどうしたんだ？

それからの記憶がない。

全身に酔いが回って、そのまま眠ってしまったのだろうか？

かつてない程にアルコールを大量に摂取した影響で、これ程全身が重苦しくて、体中の筋肉も緩んだまま身動きが取れないのだろうか？

アルコールが原因なら、自分が意識すれば起き上がれる筈だ。

目を覚ます程度なら訳はない。

せめて、瞼を動かす位なら……。

俺は、一度は諦めた筈の『自分の体を動かす』という行為を、もう一度だけ試してみた。

今回は、瞼を動かす事にのみ意識を集中して、瞼が開いて周囲を照らす陽光が、瞬時に視界を真っ白に染め上げてしまう様を連想しつつ、瞼を開いている自分をイメージした。

カチッ！

不意に頭の中で何かのスイッチが入った様な気がした瞬間、それまで闇に包まれていた俺の視界が突如開けた。

＊

妙な夢だ。

しかし、今しがたまで俺を束縛し続けた悪しき体験が、他愛もない夢の欠片に過ぎないと知ると、妙に安心しつつも、何だか気が抜けてしまった。

ふと目覚まし時計を見ると、午前7時36分を示している。

無意識のうちに止めたのか、それとも昨晩は目覚ましをセットし忘れたのか、普段の起床時間を30分程過ぎていた。

それでも、今から準備をすれば、会社に遅刻するという時間でもない。

未だに全身がだるく重苦しく、気分もすこぶる優れなかったが、それだけの理由で会社を休む訳には行かないだろう。

例のプロジェクトが採用されなかったからといって、他に俺のやるべき仕事がない訳でもない。

当面は単なる雑用の手伝いをするしかないのだろうが、いずれまたチャンスは巡ってくる……そうとでも考えないと、仕事などやっていられない。

とにかく、会社へ行こう。

幾ら自分の手がけたプロジェクトが潰れたといっても、二日酔いで休ませてくれる様な、社員に手厚い会社ではないのだから。

俺は力なくヨロヨロと立ち上がって、千鳥足のままユニットバスへ向かい、少し熱めのシャワーを頭から被る。

体は相変わらず言う事を聞いてくれないが、これで気分だけでも少しはマシになる。

そのまま鏡を覗き込みながら髭を剃る。

酷い顔だ。

造形の事ではない。

すっかり疲弊して憔悴しきっていた。

自分で自分の顔を見て『生ける屍の様だ』と思ってしまうのだから、相当酷いのだろう。

確かに気分的に落ち込んでいるという事はあるだろうが、昨夜泥酔した影響も相当残っているのだと思う。

そこからは毎日の習慣として身についている手順に従って、黙々と出勤準備を整えていく。

現在の気分では朝食を取る気にもならなかったから、その分睡眠時間を稼げたと考えれば、実は意外とラッキーだったのかもしれない。

外に出ると、眩しい太陽の光が痛い位に燦々と照りつけている。

きっと、冬眠から抜けたばかりの動物が、初めて春先の日の光を受けた時にも、今の俺と同じ様な印象を受けるに違いない。

それから、散々見慣れた変わり映えのしない風景に視線を漂わせつつ、いつもの慣れ親しんだルートを辿って会社へと向かう。

ラッシュアワーの電車に揺られて、出勤の段階で既にその日の気力を殆ど使い果たしながらも、俺は昨日と同じ道を同じ時間に同じペースで歩いていた。

昨日とは何も変わらない、そして明日もきっと変わらないであろう、変わり映えのしない一日の始まりを過ごしていた。

しかし、それらは一見同じに見えたとしても、昨日と今日は、そして今日と明日は、必ずどこかしらが微妙に食い違っているものだ。

そんな奇妙な食い違いに気付いたのは、人の流れに紛れて列車を降り、ちょうど駅の改札を抜けた時だった。

そこにいる者全員ではないが、俺とたまたま視線のあった者のうちの何人かが、目の前にあるものに驚いた様な、見てはいけない物を目の当たりにした表情のまま瞬間的に氷結して、すぐに視線を逸らされてしまった気がした。

最初は気のせいだと思っていたのだが、驚愕の眼差しは俺に向けられている様にも見える。

一つや二つでは気付かなくても、出勤途中の僅かな時間に何十にも及ぶ驚愕の表情を目の当たりにすれば、少しは不可解に感じて不思議ではない。

やはり、傍目にも相当酷い顔に映っているのだろうか。

確かに、先程鏡に映った俺の表情は、自分自身でも反吐が出る位に酷かった。

しかし、元々顔の造形自体はそれ程酷くはないのだから、やはり俺の心理的な側面の影響と、昨晚の泥酔による疲弊が原因なのだろうか。

実際に不可解な行動をする相手に直接聞いた訳ではないだけに、真相は未だ明らかになっていないが、予想するに大方そういった事なのだろう。

酒の影響は、さすがに今晚ぐっすり寝ればかなりマシにはなるだろうし、俺の心理的な側面についても、新たに集中し熱中出来るテーマが見つければ、未だに尾を引く果てしない挫折感も払拭出来るだろう。

いや、そもそも、俺に向かって驚愕の表情を浮かべているという認識が誤りで、俺とは全く関係のない原因によるものを、このところの心理的ストレスによる自意識過剰から気にし過ぎているだけ……という可能性もありうる。

そうだ、俺には関係のない事かもしれない。

とにかく今は、面倒臭い余計な考え事はやめよう。

「おはよう」

もう会社にかかなり近い所で、背中から誰かに声をかけられる。

これまでは碌に話をした記憶もないが、同じ部署に属する同僚だ。

「おはよう」

それ程近い相手でなくとも、一応同僚なのだからと返事を返す。

足早に俺を追い抜きざま、ちらりと視線が合った瞬間、同僚は大きく目を見開き、それから慌てて俺の視線を避けると、小走りでそそくさと社屋に駆け込んでしまった。

何なんだ、あいつの失礼な態度は。

幾ら俺とあいつの間には挨拶を交わす程度の繋がりしかないといっても、いきなり人を邪険にする様な扱いは酷すぎやしないか？

しかし、元々業務上の関わりは皆無に等しい相手なのだから、気にしなければどうと言う事はない。

奴の事など気にせず、仕事に集中しよう。

俺はそのまま社屋に入る。

今、給湯室から出てきたのは、職場のマドンナでもある同僚の女性社員だ。

「おはよう」

俺は彼女の背後から声をかける。

彼女が振り向きざまに浮かべたのは、目の前にありえない状況が出現した時に浮かべる驚愕の表情だった。

「なぜ……」

そう一言だけ呟くと、そのまま口元に手を当てて振り返り、些かの躊躇も無く走り去ってしまった。

振り返り際の彼女の瞳には、微かに潤む物が見えた様な気がした。

どうなってるんだ。

彼女とは特別な関係でこそないが、個人的にはちょっと気になる相手だった。

そして、これまでにプライベートの関係こそ築けなかったものの、仕事上の同僚として、業務上のパートナーとしての関係は概ね良好だった筈なのに。

その彼女が、俺にあの不可解な視線を投げかけ、逃げる様にして去っていった。

一瞬、俺には何は起こったのか、その場の状況を理解する事が出来なかった。

相手は辛うじて挨拶を交わす程度の、名前すら記憶の片隅にも残っていない、形ばかりの同僚ではない。

少なくとも俺にとっては特別な、いつかチャンスがあったら自分の気持ちを伝えようと、密かに狙っていた相手だ。

その彼女に、俺は最悪の形で拒否されてしまったのだ。

だが、俺を目の当たりにした彼女が受けた衝撃とは別の意味で、俺に襲い掛かった衝撃が癒える間もなく、俺の眼の前には新たな現実が突きつけられた。

「お前、なぜ……」

それは、職場で俺の直属の上司に当たる人物だった。

なぜ、なぜみんなは、俺をそんな眼で見るんだ。

上司の男は、大きく眼を見開いて口も半開きのまま、しばし硬直していた。

そして、俺が話しかけようと口を開いた途端に、慌てふためいて踵を返して逃げていった。

間違いない。

俺自身が何かとんでもない事態に巻き込まれているのだ。

確かに、今日は寝起きからどこかがおかしかった。

その不自然さを常にどこかで感じていながら、単なる偶然とか気のせいと自分に言い聞かせて、意図的に気にしない様に努めてきたのだ。

しかし、俺の良く知る人達の、昨日までとはまるで違う反応をどう解釈して良いのか分からずに、漠然とした怯えと恐れが心の内に浸透して行った。

通勤途中で、俺に対して奇妙な反応を見せる人がいる……そう思ったのは、やはり気のせいや偶然ではなくて、確かに俺に向けられたものだったのだ。

でも、俺に一体何が起きたのだろうか？

俺はプレゼンに失敗して、酷く落ち込んで、同僚と飲みに行き泥酔した。

その結果、今日の気分も最悪だが、何とか重苦しい体を引きずって出社したのだ。

それが全てだ。

いや、全ての筈、なのだが……。

「お前、どうしてここに……」

次に俺の目の前に現れた男は、俺の良く知っている顔だった。

目の前にいるこの男こそ、今回のプロジェクトで俺とチームを組み、昨晚共に自棄酒を飲んだ相手だからだ。

それだけでなく、奴とは妙に気の合う所があった為か、プライベートでも良く遊びに行く間柄だった。

同僚であると同時に、友達でもあるのだと思う。

その奴までもが、人を突き放した様な表情をするなんて、一体どうなっているんだ。

ただ、これまでに顔をあわせた連中とは違って、奴だけは俺の前から逃げようとはしなかった。

俺にも何となく、自分がやんごとない事態に巻き込まれているらしいとは認識出来ていたが、その正体を確かめたいと思う反面、事実を知らない方が良いのではないか……とも思った。

しかし、このまま訳もわからずに知人から逃げられる現実にも耐えられないので、俺は覚悟を決めて口を開いた。

「どうしてここになって、どういう意味だ？ どうして、みんな揃いも揃って『なぜ……』って言ったきり、俺から逃げていってしまうんだ？ これは新手の虐めか何かか？」

半分、答えが帰って来るとは期待してはいなかった。

でも、俺だってどれ程混乱して当惑して、何をどう対処して良いか分からないという事情を、誰かに聞いて欲しかった。

俺の意思を伝えたかった。

「どうしてって、お前は、一週間前の夜に二人で飲んで、俺と別れた後に電車に撥ねられたんじゃないのか？」

俺には、同僚の発した言葉の意味が、しばらくの間理解できなかった。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。